

高崎市文化事業広報誌

劇場都市

vol **05**

2018 SUMMER

Takasaki Cultural Event
Information Magazine
GEKIJOTOSHI

公益財団法人
高崎財団
The Takasaki Foundation

都市は劇場であり、劇場は都市である



◆インタビュー
高崎市出身、観世流能楽師

下平 克宏が語る



◆下平克宏(しもだいらかつひろ) Katsuhiko Shimodaira
1958年(昭和33年)高崎市生まれ。一女の父。高崎高校から学習院大学を経て東京藝術大学卒。藤波重満氏の下で8年修業、昭和63年独立。演能の会を主宰、自身の研鑽と能楽の普及に努める。東京を中心に活動し、地元では高崎薪能、前橋薪能、しんまち能、玉村能などにてシテを勤める。観世流シテ方準職分/重要無形文化財総合指定保持者/くま観光特使

能の魅力

初心わするべからず。

世阿弥の言を引き継いで、
七百年間、進化を続ける
能の今、そして、これから――。

能楽師として今年三十年。人生の節目を迎え、芸に一層の磨きをかける下平克宏さん。能の素晴らしさを「骨董的価値でなく、七百年続く現代劇であり続けること」と話す下平さんに、その魅力について都内の稽古場で聞きました。

日本人の感性を 呼覚ます

――能の普及活動のひとつとして高崎市内の三つの中学校で移動音楽教室をやられているそうですね。

群馬交響楽団の移動音楽教室にならって一昨年から始めました。体育館で楽器や謡の体験をしてもらい、最後に「羽衣の舞」を見せると、子ども達は「面白い」って喜ぶのですよ。

頭で考えるのではなく、感じる。すると自分の中に眠る日本人としての感性、日頃気付いていない感覚に目覚める。「自分ってこういうことに感動するのだな」と気づくのだと思います。

――日本人ならではの感性が呼び起こされる。

ええ。日本人は桜が咲いて散るのを喜ぶでしょう。それは「ものあはれ」や無常観、滅び行くものへの美しさ。そういう内在しているものに気付かされるのだと思います。

の力ですね。

そうですね。本物の芸能を見せてくれたというのに感謝の思いもあったのかもしれないですけどね。

能と出会い、 能と生きる

――能との出会いはいつでしたか？

学習院大学時代に能のサークルで、最初は興味半分でしたが、実際にやってみて深みにはまっていきました。それまでは、ピアニストの中村紘子さんのおっかけをしていたほどクラシック音楽が好きで、日本のものは退屈だ(笑)なんて思っていましたからね。

――それは、意外なお答えです。そこからプロにつながる、どんなきっかけがあったのですか。

『道成寺』という能の録音テープを先輩から借りて聞いたとき、それまでの考えが打ち砕かれました。乱拍子という、非常に長い間の瞬間に鼓を「ハッ!」と、裂帛な掛け声で打っていく。その長い間に衝撃を受けました。掛け声と鼓が長い間に配分されている。「この感性って洋楽にはない。これはすごいものに違いない、見落としていたな」と思いました。

能は、実は身近な存在なのです。その場で楽しむエンターテイメント性というより、しみじみと感じ入ったり、ふと思いついたりする余韻があるものです。狂言も、心に残る笑い、あとでじんわりと分かる面白みがある。人生と重ね合わせたり、いろいろな感じ方があるのです。

――考えるより、感じることですね。とはいえ、初心者はどうな風に能を見たらよいでしょうか。

正しい能の見方というのはないわけですが。例えばベートーヴェンの音楽を聴くときに、どこに注意して聴けばいいか、ゴッホの絵をどこから見たらいいかと質問する人はいまませんよね(笑)。まさにそれと一緒に。自分の心の赴くままに見て、どこかに興味や接

点を感じたら、しめたものですね。

――頭でつかちになると、かえって難しい。

確かに簡単な芸能ではない。奥深い芸能ですが、必ずしも全てが難しいわけではないので、紐をほどいていくように興味を広げていってほしい。大筋のストーリーや見どころはインターネットですぐに分かりますからね。

人類共通の 「祈りと鎮魂」がテーマ

――改めて、能の世界感とはどんなものでしょうか。

能の大きなテーマは「祈りと鎮魂」です。国土繁栄、安穩、五穀豊穡を祈り魂を休める。これは、世界平和、命を大事にする人類普遍のテーマですから、世界にも通用するのです。

海外公演では能楽堂はないので、いろいろな劇場や野外でやりますが、不思議とどんな場所でも溶け込みます。外国でも喜ばれるのは、人類普遍のテーマが魂に響くからではないでしょうか。

――壮大で、原始的なテーマですね。

能の始まりは儀式で、お寺や神社で司るものでした。当時は猿楽と呼ば

れ、演劇性というより呪術性のある儀式から派生したのです。クラシック音楽も教会音楽から始まったように、突き詰めてみるとそういうところに拠り所があるのですね。

――壮大なテーマを実際にどんな場面で感じられましたか。

初めて海外公演で行ったルーマニアです。ルーマニアは、共産主義のチャウシエスク統治時代に古い街並みを壊し、でっかい宮殿を作って国民は貧窮しました。その政権が倒れ民主化後、しばらく経った二〇〇九年、首都ブカレストの国立劇場で能をやったのです。

劇場マネージャーから「能は日本でメジャーな芸能なのか」と聞かれたので「もちろん。日本を代表する舞台芸術だ」と答えると「ブカレストは昔、第二のパリと呼ばれた文化都市。我々は貧しい生活をしているが、文化を見る眼は高い。もし、見ていて面白くないなと思ったら途中退席する人もいるかもしれないが、悪く思わないでくれ」と。

そこで二回公演したのですが、満席で退席する人もなく、終われば「ブラボー」の嵐(笑)。能でブラボーってないので戸惑いましたけど、初めてカーテンコールをやりました。言葉が分からなくても、何かを感じてくれたのかなと嬉しかったですね。

――歴史の風雪に耐えた伝統芸能

それからは、舞台に向けて稽古したり、鑑賞会に行ったりと夢中になり、四年のときに先生から「プロの能楽師にならないか」と言われて「じゃあやってみるか」と。あまり深く考えるタイプではないので(笑)。経済学部で就職先も決まっていたのですが、東京藝術大学に入りなおしました。父には猛反対されましたがね(笑)。

——どんな修行時代でしたか。

重要無形文化財の藤波重満先生の内弟子として住み込みで入り、芸大に通わせてもらいました。内弟子時代は、舞台の修行だけでなく、稽古場の掃除や運転手、カバン持ちもするわけで、当時は芸の稽古だけでいいじゃないか、とその意味が分からなかった。

でも、いざ自分が独立すると、座を束ねる者として隅々までいかに気配り

出来るかどうか、必ず問われるときがある。主役をしながら舞台を成功させるには、アンテナを張り巡らせる感受性が豊かでないとダメで。そういうものを八年間の修行で学びました。

——能楽師として、日頃心がけていることは何ですか。

歌舞伎を観たり、クラシック音楽を聴いたり、いろいろな文化に触れるようにしています。感性が鈍ると慢心した芸になってしまうので。

「今日はよかったですね」とお客さんに褒められるときって、案外自分では「声が出なかつたな」なんて思っているときなのです。

ところが、「今日はよく出来たな」と思っているときは、お客さんが冷やかだつたりする。自信満々で独善的なものがでてしまったのでしょね。自



御息所の生霊は、葵上を激しく打ち握える。手前の小袖は葵上を表す(『葵上』より)

——それは、面白い試みですね。さて、7月の第13回「高崎演能の会」の見どころを教えてください。

昼の部は「能を楽しむ、心のおもむくままに」というテーマ。『五人囃子見参』は私が謡手で、笛、小鼓、大鼓、太鼓となります。お囃子担当に和楽器の解説してもらい、その魅力を感じてもらいたい。

そして、野村萬斎の狂言と有名な『羽衣』で、幽玄な世界をお届けします。

夜は、「蠟燭能 炎が描き出す幽玄の世界」です。蠟燭の炎を照明のメインにした陰影の中で、ちよつと昔、江戸時代くらいにタイムスリップして見てもらいたいなと思っています。

——今年30周年の下平さん。今後の夢や目標は何でしょうか。

能楽師人生の折り返し地点、自分の芸の鍛錬や能の普及、後輩指導はもちろん、高崎芸術劇場ができるので子ども達にも能を見てもらいたいと思っています。学校単位で見てもらえるといひです。劇場空間というのは、やはり思い出になりますから。

私自身は、若いときに出来なかつた役への取り組みなど、年を長けた心の表現、豊かな表現をしていきたいと思っています。十月には銀座シックスで、30周年の記念公演、大曲の『卒塔婆小



「背中に目を持って」世阿弥の言葉は今も生きています

分ひとり楽しんでいられるようになってやうと、これダメなのですね。

——慢心しないこと。どんな分野にも通じることかもしれません。

世阿弥の書『風姿花伝』に「離見の見」という言葉があります。「背中に目を持って。そうでないと単に自分本位なものになってしまふ」という戒めです。夢中になっている自分をもうひとりの冷静な自分が見ているということ。七百年前の世阿弥がこう言っているのですから、すごいことです。

——世阿弥の言葉、今も教訓になりますね。他にもありますか。

よく知られている「初心、わするべからず」は、初めて物事に向かい合ったときに心掛ける戒めです。たとえ上手いっても安心するな。うまくいなくても、次に生かせと。続く「時々の初心、わするべからず」は、人生に

「町」を行います。今年の大きな節目の舞台です。

——最後に高崎の皆さんへメッセージをお願いします。

能は堅苦しいというイメージがあるかもしれませんが、まずは気軽に足を運んでほしいと思います。能に触れることで、自分の感性の豊かさを広げることにもなりますし、ひいては日本文化の普及にもなりますから。

——公演を楽しみにしています。今日は、ありがとうございます。

第13回高崎演能の会

【日時】2018年7月31日(火)昼の部14:00開演/夜の部18:30開演
 【会場】高崎市文化会館
 【出演】下平克宏、野村萬斎 ほか
 【演目】昼の部 『能を楽しむ 心のおもむくままに』(解説:下平克宏)
 『五人囃子見参』、狂言「蚊相撲」、能「羽衣 和合之舞」
 夜の部 『蠟燭能 炎が描き出す幽玄の世界』(解説:手島仁)
 仕舞「頼政」、狂言「文山賊」、能「葵上 梓之出」
 【料金】S席6,300円(友の会5,800円 U-25 4,300円)
 B席3,800円(友の会3,500円 U-25 1,800円)
 【お問合せ】高崎市文化会館 027-325-0681

能って何？

今から七百年前、南北朝から室町の初めにかけて誕生した能。三代将軍足利義満の庇護を受けた観阿弥、世阿弥父子によって大成され、豪華絢爛の桃山文化を吸収。その後、徳川幕府の援助を受け洗練を深め、今や世界の人々を魅了するに至る。詩と劇と音楽が融合した歌舞劇で、謡いという言葉や囃子という音楽に、役者の動きで情景や心象を描写して物語を作り、観客の想像力に訴えかける楽劇である。

Q 能は、どんな人を見た？

A 高い階級の人から一般民衆まで楽しんだものです。昔の能役者はいわゆる旅芸人のような人達でメジャーになったのは足利義満が認めてから。元々は庶民のもの。今でもそうですけどね。

Q 歌舞伎のように女形など得意とする役柄がある？

A 男、老人、女、神様などいろいろな役柄を全部やります。主人公のシテ形、相手役のワキ形、お囃子形と狂言形の四つのセクションに分かれる分業制です。

Q 女人禁制？

A 江戸時代までは女人禁制でしたが、明治以降、開放されて女流能楽師もいます。歌舞伎よりも古いのだけど進歩的。時代に応じて変えていかなければと当時の人の先見の明があったのだと思います。

Q 能ならではの動きは？

A 具体的な演技方法と、決まった動きの型があります。右手をぐつと前に出して、自分の意志や「私だ」と表現したり、「それだ」「あなたは」と指したり、いろいろな意味があるのが型。立くのは演技であり、表現。それらが組み合わさって出来ています。

Q どのように伝えられてきた？

A 型の覚書があり、それをやってみせて伝える口伝です。大変、努力がいること。昔の人は本当にすごい。七百年前から絶えずほぼ第一線で続いている芸能。骨重品の価値ではなくて、七百年続く現代劇。それが能のすごさだと思います。

Q これからの課題は？

A 世界的に日本のアニメや漫画が人気ですが、伝統あるものを求める海外の人は能楽堂に来てくれます。とはいえ、我々のアピール不足もある。空港に向くのもいい。「空港のロビーに能面をつけた人がいた。こつちも面白そうだ」と思ってもらえたら(笑)。外国の人たちにもっと触れてもらうことが大事だと思います。



ぜひ、「高崎演能の会」にお越しください。

市民の娯楽の殿堂として輝いた 明治・大正時代の高崎の劇場 高盛座と藤守座

伝馬役の費用を補うために 始まった高崎の興行

江戸時代、高崎藩は尚武の気風が強く、文武を奨励し、領内住民に歌舞音楽、手踊りの類を許しませんでした。当時、中山道の宿場町として大名行列その他の際に、輸送を担当する伝馬役を本町、田町、新町（現在のあら町）で負担していました。本町と田町は大商店が多く、人馬継ぎ立てなどの費用負担に堪えられましたが、新町は財政上の力が弱く、年々町は疲弊していきました。幕末の文久2年（1862）、新町の町民総代たちは伝馬役の費用を芝居や相撲などの興行収入で補おうと、禁制を破って藩当局に訴えました。この事件は御伝馬騒動といわれ、総代たちは入牢、罰金などの重い処罰を受けましたが、慶応2年（1866）になって藩

資金に当てたといわれています（今の金額に換算すると15万円くらい）。菊五郎一座の公演期間中は、連日超満員という盛況ぶりでした。しかしその後、映画の流行から昭和4年に廃業になりました。



▲明治40年に新築された八島町の高盛座(川合英夫氏所蔵)

当局も理解を示し、江戸大相撲の興行が許可され、新町も相当の利益を上げることができました。

その後間もなく明治維新となり、諸制度も変革されたので、新町では常設芝居などの興行を藩当局に請願しました。

明治2年（1869）1月7日、正式

に許可され、2月末から3月にかけて江戸歌舞伎役者を招き、仮設舞台で芝居興行を行いました。そして6月には、坂東彦三郎等によって「坂東座」が新町に創建されました。落成した月には、尾上菊五郎や阪東美津五郎などの歌舞伎役者を招いて興行した記録が残っています。

歌舞伎座を模した県下一の劇場 八島町の「高盛座」

「坂東座」は明治5年（1872）4月に火災で焼失しましたが、8月に岩井半四郎、中村仲蔵等によって同じ場所に再建され、「岩井座」と改称し、芝居興行を続けました。

日本鉄道会社中山道線が竣成し、高崎停車場の位置が決まると、岩井座のところが停車場入口の道路となっていたため、明治17年（1884）3月に八島町北側（井上ビルの辺り）に移転し、小屋掛けで興行しました。その後、明治27年（1894）12月2

日の改築を機に、「高盛座」と改称。株式会社組織の貸し劇場となり、頭取兼取締役は久保村徳次郎、副頭取兼取締役は後に白衣観音を建立した井上保三郎でした。

建築は、東京木挽町（中央区銀座）の歌舞伎座を模し、市内で初めて無数の花電灯を取り付けるなど、名実ともに県下一の劇場となりました。以降、市内のほとんどの興行はここで行われました。

高崎初の活動写真を上映

明治30年（1897）に東京と大阪などで「活動写真（映画）」が初公開され、高崎では明治32年11月の8日間、高盛座で上映されたのが初めてでした。内容は東京をはじめ各地の芸者の踊り、欧米や日本の風景を写した短いもので、日替わりで内容を差し替え、円熟した弁士が説明にあたりました。動く写真を見た観客は大喜びで、連日満員でした。

昭和4年（1929）に取り壊されるまでの35年間、高盛座は娯楽の殿堂として高崎市民に親しまれました。全盛期は大正時代で、菊池寛や久米正雄らを招いての文芸講演会、沢田正二郎率いる新国劇「国定忠治」の公演なども行われました。中でも特筆すべきは、明治歌舞伎界の立役者であり、不世出の名優といわれた九代目市川團十郎と並び称された、五代目尾上菊五郎の来演でした。一座を迎えるため、市内の有志が一口20円の株を引き受け、

映画の灯を守り続けた 新紺屋町の「藤守座」

藤守喜太郎が明治10年頃に田町通りで「田琴（毎）座」という寄席を経営し、評判がよく大入りが続きました。その後、明治13年（1880）1月の大火で焼失したため、新紺屋町（元のオリオン座の場所）に新築移転し、同年5月に「藤守座」として舞台開きを行いました。「高崎繁昌記」が刊行された明治30年ごろには、高盛座と並んで高崎町民の娯楽の場として賑わいをみせました。

創業者の藤守喜太郎は、東京で人力車が発明されるとすぐに高崎で取り入れ、人力車事業を始めたり、君が代橋をかけて橋銭を稼いだりと、興行的な才能のあるアイデアマンでした。藤守座は、大正5年（1916）に芥川辰次郎、藤井勘一郎らによって「株

世界館」となり、活動写真上映館として再スタートしました。さらに、前橋の映画興行王、野中倉吉の手に移り改築されて「第二大和」となりました。その後も「高崎松竹映画劇場」、「オリオン座」と名を変えて、昭和37年（1962）に鉄筋コンクリート2階建てに改築、1階に食堂、2階に映画館という新方式で映画の灯を守り続けました。

寄席や演芸なども盛んで 賑わった席亭

「高盛座」と「藤守座」の二つの劇場のほかに、「席亭（寄席・演芸場）」として、新町の「高崎亭」、鞘町の「共楽館」、新紺屋町の「松田亭」の三軒が、「群馬県営業便覧（明治37年発行）」に

掲載されています。また、高崎の寄席状況について明治10年12月の『郵便報知新聞』によれば、「芝居は田町の藤守座、新町の岩井座等にて皆櫓を上げたり、寄席は七軒紺屋町にハ軽業を興行せり」とあって、寄席の盛んな様子を伝えています。

なかでも明治31年設立の松田亭では、義太夫、浪花節、講談などが行われ、後に「陸花亭」と改称。市内唯一の寄席として営業を続け、昭和初期に閉館しました。

※参考資料「高崎市史 通史編4」、「高崎繁昌記」等
※写真資料「高崎市史 通史編4」明治40年に新築された八島町の高盛座、「高崎市史資料編9」藤守座



▲藤守座(『高崎繁昌記』より)



▲高盛座(『高崎繁昌記』より)



GBGBで夢の共演。左から綾小路翔、奥野敦士、布袋寅泰(高崎アリーナにて)

今年5月にロックイベント・GBGBが開催された高崎アリーナ

70年代高崎のミュージックシーン 高崎ロック史

ビートパンク “高崎の音” が生まれる瞬間

「若者が音楽を手にした！」

日本ロック界のカリスマ、BOØWY。BOØWYに憧れた数多のバンドの中から、BUCK-TICK、ROGUEが誕生し、群馬3大ロックバンドと呼ばれる。彼らの背を見てプロを目指したミュージシャン・吉田みさおは今、CM、放送業界で活躍する。

70年代から80年代にかけて高崎にどんなミュージックシーンがあったのか。当時の証言を元に紐解いていく音楽ファン必読の特集！



「高崎に恩返しをしたい」と話す吉田みさお。JR高崎駅西口自由通路に設けられたアマチュアミュージシャンのための演奏の場、高崎ステーションステージにて。

ビートの聖地「高崎に来たぜ!!」

1980年代、高崎から生まれた伝説のロックバンドBOØWYと、BUCK-TICK。前橋市出身の奥野敦士が結成したROGUE(★1)はロック界のカリスマであり、レジェンドである。彼らはその後のバンドブームに火をつけ、若者カルチャーに影響を与え、社会現象を巻き起こした。

今年5月3、4日、高崎アリーナで行われたロックイベント・GBGB(ROGUEの主催)には元BOØWYの布袋寅泰もステージに立ち、その横で「ビートの聖地、高崎に来たぜ!!」と叫んだのは氣志團の綾小路翔であ

る。ビートはBOØWYサウンドを象徴するキーワードである。

「うちの近所からスターが出た!」
ビートパンクが「高崎の音」

BOØWYの誕生に刺激を受けた高崎出身のミュージシャンに吉田みさおがいる。吉田は1972年、高崎市石原町生まれ。90年代にジャングルスマイルとしてメジャーデビューし、現在は作曲家、俳優など多分野で活躍する。BOØWYやバクチクのメンバーのひとまわり年下の吉田は、市立片岡中学に通っていた頃、彼らの活躍を見て「近所からスターが出た感じ。プロになることが夢でなく、自分もできると思わせてくれた」と話す。

事実、吉田は中学3年時にヤマハ主催のコンテスト「ヤマハ・バンドエクスプロージョン'87世界大会」で日本武道館のステージに立っている。

「先輩の音に影響を受けて、自分たちの音を作る。そして自分たちの音を聞いて、後輩が新たな音をつくる。そうやって高崎のサウンドが創られ、受け継がれていく。高崎の音ってビートパンクだと思う」と吉田は高崎のロックを位置付けている。

60年代、若者は音楽で権力と戦った

60〜70年代にフォークロックと若者文化は劇的な変化を遂げている。



ヤマハのコンテストで武道館に立った吉田みさお(左端)率いる「まよねえず」。中学生らしく「丸坊主」で出場

音楽業界では、アメリカのヒット曲をカバーした和製ポップスが生まれ、坂本九の「上を向いて歩こう(1961)」などが大ヒット。ビートルズ来日(1966)で熱狂的なグループサウンドブームが起こり、ベトナム戦争への反戦や平和メッセージがカレッジフォーク(関東)、反戦フォーク(関西)として学生に広がった。「70年安保闘争」とフォークソングは学生運動と一体となって熱を帯びた。

高崎経済大学は全国屈指の学生運動の拠点で激しい闘争が続いていた。並榎町のキャンパスから中心市街地まで学生のデモ行進が連日行われ、反戦フォークや長髪などのヒッピー文化は高崎の学生にも浸透した。

四畳半フォーク全盛時代と
ロックの台頭

70年代に入り学生運動もかつての勢いを失うと、貧しく切ない若者の同棲

を歌った四畳半フォークが生まれた。激しい反戦メッセージは失われたが、それでも時代をひきずっていた。

南こうせつとかぐや姫の「神田川」が大ヒットし、井上陽水「氷の世界」が史上初のミリオンセラーとなった。この時代、中学生がフォークソングの担い手として登場し、中学生でも手に入るフォークギターと中学生でも演奏できるフォークソングが大流行した。レコードを借り合っ、当時、流行り始めたラジカセに録音した。「22歳の別れ」のイントロを合奏して悦に入り、60年代のメッセージソングに強く惹かれることもあった。

60年代後半から70年代に日本のロックが黎明した。氷室京介が中学生の時に、テレビで偶然、矢沢永吉のキャロルを見て、フォークギターからエレキギターに持ち替えたという。いわゆる「ツツパリ」のロックン・ロールバンドは、高崎周辺でも人気を集めるグループが出てきて、今なおキャリアの長いバンドとして存続している。

既成の権威や体制に対する反抗心などもあったかもしれないが、「カッコいい」という素朴な憧れが、ティーンエイジの演奏力と音楽性を高めた。フォークロックが闘争から解放された、と言えるかもしれない。

★1 BOØWY(氷室京介、布袋寅泰、松井常高、橋本こと)、BUCK-TICK(櫻井敦司、今井寿、星野英彦、樋口豊、ヤカミトル)、ROGUE(奥野敦士、香川誠、西山史晃、深沢靖明)

憧れのギター
「ストラトキヤスター」

17歳で夭折した山田かまちもロックを愛した芸術家である。かまちの絵や詩は高崎市山田かまち美術館に展示收藏され、その生き様は今尚、人々に感動を与えている。



かまち愛用のストラトキヤスター
(高崎市山田かまち美術館蔵)

かまちは1960年、高崎市生まれ。BOØWYのメンバー氷室京介、松井常松と市立倉賀野小学校からの同級生であり、音楽を語り合った仲だ。音楽を愛したかまちは、とりわけロックに傾倒し、ビートルズ、レッドツェッペリン、エアロスミス、クイーンなどを好んだが、これらは当時の若者で夢中にさせたロックグループだ。

かまちは77年8月、自宅でエレキギターの練習中に感電死した。このギターは、その年の7月、誕生日に父親と買いに行った物だ。エレキギターを手に入れるため、かまちは小遣いを貯め、足りなかつたら父親が足してやろうと出掛けたそうだ。

かまちが選んだのは、国産メーカーのストラトキヤスター。色はナチュラル。ステイジ映えしそうなギターだ。

かまちが意識したギタリストが誰なのかわからないが、リッチー・ブラックモアやエリック・クラプトンが弾いていた中高生憧れの楽器だった。生前、「誰からも愛されるロックを作りたい」と話していたというかまちの心

かった。

当時、アマチュアバンド活動が盛んになると、雪草楽器や新星堂にスタジオが作られ、BOØWY、バクチクのメンバーもここで練習をした。

吉田るさおも高崎で仕事をしていた時代、レコーディングなどに市内のスタジオを利用。中高生のロックバンドはお金のかかるスタジオは頻繁に使用せず、練習場所を探すのが大変で、親のツテを頼ることもあった。

バクチクのライブは
中学生には恐かった?!

この頃、新星堂高崎店に勤務し、BOØWYやバクチクと親交のあった中島賢治さん(高崎サウンドサービスプランニング代表)は、店内でのミニコンサートの他、隣接する飲食店でもライブを企画しており、BOØWY初期のライブ記録に店名である「高崎Make up」の記載が見られる。

BOØWYのデビュー(1982年)以降に新星堂主催の高崎ロックフェスティバルが数回開催されている。中島さんは高崎出身でメジャーデビューま



新星堂高崎店で高崎ロックフェスティバルに関わった中島賢治さん。デビュー当時のBOØWYとの思い出は多い

に燃えていたロックへの衝動、「ギターが弾きたい」という気持ちは、この時代の多くの中高生は少なからず持っていた。かまちの亡くなった日に駆けつけた氷室京介は一言、「かまち君はハードロックでした」とかまちの母に呟いたという。

高崎のサブカルチャーの源流

70年代初頭の高崎にライブハウスはなかったが、市内の楽器店ホール(新星堂高崎店・常盤町のYAMAHHA)で高校生、アマチュアバンドのコンサートが行われていた。労働運動の青年たちの活動も、高崎のサブカルチャーを形成した。群馬音楽センター会議室では、若者主催のロックやフォークのレコードコンサートが行われ、また、茂木正男の自主グループ「メーヴェ」が8ミリ映画の上映会を始め、後の高崎映画祭に発展する。第1回目の上映会の参加者は茂木一人で、茂木は誰もいない会場で開会挨拶をし、映画上映を始めたという逸話が残る。



高崎ロックフェスティバルのポスター(写真上)。ゲストはBOØWY、BIBI LIVEのポスター(写真右)。ゲストはBUCK-TICK。(共に資料提供/中島賢治さん)

たはデビュー間近のミュージシャンを数組招聘。「この頃、プロをめざした若者の動きが出てきた」と感じていた。

1984年10月10日、高崎市文化会館で行われた同フェスには、地元のアマチュアバンドと「非難GOGO」から改名したばかりのバクチク、ゲストとしてBOØWYが出演している。

高崎では、それまでもロックコンサート用の会場を探すのは大変だった。このコンサートがきっかけで皮肉にも逆風が強まることになる。この時、会場楽屋の通路が出演者らのブーツで汚れてしまったこと、会場内で爆竹を鳴らしたファンがいたことで、中島さんたちは、会場の清掃にも心をつくした。この後、高崎市の会館はロックのコンサートに風当たりが強まった

75年、当時の高崎市庁舎の東側に高崎地域医療センターが開館すると4階ホールで、若者や高校生がコンサートや映画の自主上映会、演劇などを行った。

後にクラブジャズシーンで活躍する高崎出身のDJ小林径は、布袋寅泰が新島学園高等学校時代にバンドを組んだ先輩である。小林と同年代の高校生は、音楽性が豊かで演奏レベルも高く、レッドツェッペリンやディーパール、キングクリムゾンを完璧にコピーしているバンドもあった。高校の垣根を越えて交流し、高校生が自主コンサートを行う土壌がつけられていた。高校生の布袋らも、こうしたステージで演奏したが、コピー一辺倒の演奏に疑問を感じ、布袋はオリジナリティを求めるようになっていった。

登竜門のヤマハ・イーストウエスト

1976年にアマチュアバンドの登竜門「ヤマハ・イーストウエストコンテスト」がスタートした。79年大会で、氷室率いるデスペナルティと布袋のブルーフィルムが関東甲信越大会の決勝を争い、デスペナルティが決勝出場を果たす。その年のグランプリはうじきつよし率いる「子供ばんど」で、アナキーも出場、デスペナルティは入賞となった。

81年大会には西毛(群馬県西部)で活動していた魔魅バンドが決勝に進

み、横尾清一がベストボーカル賞を受賞。バクチクは84年のヤマハのポップコン(ポピュラーソングコンテスト)高崎地区大会で特別賞を受賞。プロをめざし上京した氷室京介らは81年に暴威を結成、翌82年にBOØWYにあらため、3月「MORAL」でビクターからメジャーデビューを果たした。

レコード店・楽器店が応援

BOØWYのデビューアルバムが発売されると、高崎市内のレコード店は、BOØWYの特設コーナーを作って販促応援し、メンバーもこまめにレコード店を回った。

中心商店街のレコード店は新星堂、サカイ、高崎名曲堂、タクミ、ドレミファ(ドレミ京橋堂)があり、高崎名曲堂(大手前通り)の吉本店長とBOØWYのメンバーは懇意で「さっきまで布袋君がいたよ」と店先で盛り上がることもあった。

楽器ショップは、赤羽楽器、雪草楽器、根本楽器、松原楽器、ヤマハなどが高崎中心商店街にあり、県内一円から若者が集まり、多くのアマチュアミュージシャンを育てる役割を果たした。ギター選びやサウンドづくりのアドバイスを受けたら、音楽談義に花を咲かせたり、貴重な情報交換の場であった。イーストウエストコンテストは、楽器店からの応募で出場するのは、バンドと楽器店との結びつきは強

とリアルに記憶している。

次の世代を育てたい

そんな吉田は、幼少期から作曲、編曲にも興味を持ち、後の音楽活動の中で、CM曲の製作を行うなど仕事の幅を広げていく。「僕は高崎に育ててもらったと感じています。音楽を志す若者のためにも、高崎に恩返しをしたい」と話す。BOØWYやバクチクを聞いて次世代がバンドをつくり、音楽をつくり、その音楽を聞いて、また次世代が自分の音をつくっていく。「高崎の音ってあるんですよ」

吉田は言う。吉田には高崎のビートが聞こえているようだ。

●プロフィール
吉田るさお Isao Yoshida
昭和47年高崎市生まれ。東京音楽大学 作曲科卒業。数々のヒットを生み出した「Jungle Smile」のメンバー。活動休止後は、女性アーティストを中心に楽曲提供、プロデュースと共にCM業界に進出。ワコールの「リボンプラ体操」で全日本CM放送連盟「ベスト音楽賞」を受賞以降「唄踊りモノCMの錬金術師」として活躍。子供の頃から「頭の中にメロディが浮かんできた」と話す、CM業界の寵児。
〈公式HP〉
<http://www.wisao.com/~wisao/>



群馬音楽センター&高崎市文化会館&高崎シティギャラリー
伝統芸能から若手演奏家、注目の来日アーティスト情報など、見どころ・聴きどころをご紹介します。

高崎シティギャラリー コアホール
324席の贅沢。 後期 (10~3月) 5公演

この街の このステージで
この演奏家に出会える喜び。



名作「義経千本桜」を上演！
松竹大歌舞伎

人気花形役者・片岡愛之助が座頭を勤める松竹大歌舞伎。「義経千本桜」より豪華二幕『道行初音旅』『川連法眼館』をお届けする。源平合戦後、数奇な運命をたどる源義経。彼を慕う静御前と忠臣・忠信の道行を艶やかな舞踊で表現する前半に続き、後半は親を恋慕う子狐の情愛物語を描いていく。忠信を演じる愛之助は、実は狐という役どころ。狐のしぐさと忠信の演じ分けにも注目したい。様々な趣向を凝らした「ケレン味」あふれる演出は、歌舞伎初心者にもお勧めだ。



片岡愛之助

2018年9月1日(土) 14:00開演
会場/群馬音楽センター

Ⓧ 片岡愛之助、中村松江、中村孝太郎、市川門之助 ほか
Ⓨ 一、義経千本桜 道行初音旅 二、義経千本桜 川連法眼館
Ⓩ S席5,000円(友の会4,500円)、A席3,000円(友の会2,700円)
※イヤホン・ガイドのレンタル有り(700円)。

幽玄の世界へ 第13回高崎演能の会



下平克宏

能の普及に力を注ぐ高崎市出身の観世流能楽師、下平克宏による能楽公演。一期一会の能舞台は日本人の感性を揺り動かしてやまない。昼の部「能を楽しむ」では名作『羽衣』を、夜の部「蠟燭能」では炎の灯りが舞台を照らす。それぞれ冒頭に解説付き。狂言には野村萬斎が登場する。幽玄の世界へと誘う真夏の能舞台。心に何かを灯すことだろう――。

2018年7月31日(火)
昼の部14:00開演/夜の部18:30開演
会場/高崎市文化会館

Ⓧ 下平克宏、野村萬斎 ほか
Ⓨ 昼の部 『能を楽しむ 心のおもむくままに』(解説:下平克宏)、五人囃子見参、狂言 蚊相撲、能 羽衣和合之舞
夜の部 『蠟燭能 炎が描き出す幽玄の世界』(解説:手島仁)、仕舞 頼政、狂言 文山賊、能 葵上 梓之出
Ⓩ S席6,300円(友の会5,800円 U-25 4,300円)
B席3,800円(友の会3,500円 U-25 1,800円)



野村萬斎

日本ポーランド共同制作作品
4つの季節の物語《PORY ROKU》



舞台にあるのは無数の三角形。聴こえてくるのは生演奏と歌、そしてオノマトペ。訪れる“PORY ROKU(四季)”の愛あふれるエピソードに空想の翼を広げてほしい。伝統的に独自の人形劇が発展したポーランド。同国の人形劇俳優と日本の音楽的進化師の共演による今作品は、チェコの権威ある国際人形劇フェスティバルでグランプリを受賞。国内外で高い評価を受けるユニークな舞台は、あらゆる世代を虜にする。

2018年8月7日(火) ①10:30開演 ②14:00開演
会場/高崎シティギャラリー コアホール

Ⓧ テアトル・アニマツィ(ポーランド国立人形劇団)、ましゅ&Kei(音楽的進化師)
Ⓩ 全席自由2,500円(友の会2,200円 U-25 1,000円)
※4歳以上有料。4歳未満でも席が必要であれば有料。

世界トップクラスのアーティストがめくるめく登場。

街全体が心地よい空気に包まれて、私たちの感性も新しい刺激を求める季節——秋の到来。世界のトップアーティストを招いて行われるコアホール公演は、そんな敏感なココロのニーズにもきっと応えてくれるはず。

シリーズ後期は、今世界中のステージを沸かせているヴァイオリニスト、ネマニャ・ラドゥロヴィチで幕開けし、トルコの孤高のピアニスト、ファジル・サイの登場で、まさに「鬼才の秋」と呼べるステージになる。つづいて、欧州古楽の精鋭と次世代を担う若手たちによる華やかなラインナップで長い冬を彩っていく。アーティストの息遣いさえも届く、わずか324席の贅沢な空間で、あなたもホットなインパクトとインプレッションに満たされてみては？

魂が躍動する脅威のテクニックと圧倒的な存在感

ネマニャ・ラドゥロヴィチ & ロール・ファヴル=カーン

完売御礼

2018年10月5日(金)
19:00開演

Ⓧ ネマニャ・ラドゥロヴィチ(ヴァイオリン)
ロール・ファヴル=カーン(ピアノ)
Ⓨ サン=サーンス/死の舞踏
フランク/ヴァイオリン・ソナタ 長調
ドビュッシー/ヴァイオリン・ソナタ
ショーン/詩曲
ラヴェル/ツィガース
Ⓩ 全席指定6,000円
(友の会5,500円 U-25 2,500円)



©Charlotte Abramow,DG

各地の音楽シーンを席巻する孤高の天才ピアニスト

ファジル・サイ ピアノ・リサイタル

2018年11月3日(土・祝)
14:00開演

Ⓧ ファジル・サイ(ピアノ)
Ⓨ ショパン/3つのノクターン
ベートーヴェン/ピアノ・ソナタ第23番
へ短調 op.57 「熱情」
ドビュッシー/前奏曲集第1巻から
「亜麻色の髪の乙女」
「沈める寺」ほか
サイ/ピアノ・ソナタ「ゲジ・パーク2」
Ⓩ 全席指定6,000円
(友の会5,500円 U-25 2,500円)



©MarcoBorggreve

薫り立つ魅惑の声——スペインの歌姫と古楽界の名手たち

ラケル・アンドゥエサ&ラ・ガラニア

2018年12月8日(土) 14:00開演

Ⓧ ラケル・アンドゥエサ(ソプラノ)
ラ・ガラニア(古楽アンサンブル)
Ⓨ メルラ/聴いてごらん、歌をひとつ
ブスベルガー/トッカータ・アルベツィヤータ
モンテヴェルディ/これほどにも甘美な苦悩が ほか
Ⓩ 全席指定3,000円(友の会2,700円 U-25 1,500円)



古きソ連時代の響き——強靱なピアニズム、無二の個性

セルゲイ・カスプロフ
ピアノ・リサイタル

2019年2月9日(土) 14:00開演

Ⓧ セルゲイ・カスプロフ(ピアノ)
Ⓨ ラヴェル/夜のガスパール
ムソルグスキー/展覧会の絵 ほか
Ⓩ 全席指定3,000円(友の会2,700円 U-25 1,500円)



©Kana Tarumi

世界が注目。ウィーン・フィル初の女性管楽器首席奏者

ソフィー・ダルティガロング ファゴット・リサイタル

2019年3月9日(土) 14:00開演

Ⓧ ソフィー・ダルティガロング(ファゴット)
沢木良子(ピアノ)
Ⓨ テレマン/ファゴット・ソナタ へ短調 TWV41
サン=サーンス/バスーンとピアノのためのソナタ
ほか
Ⓩ 全席指定3,000円(友の会2,700円 U-25 1,500円)



チケットインフォメーション

窓口 ●8:30-17:15

窓口	電話番号	定休日
群馬音楽センター	027-322-4527	月
高崎市文化会館	027-325-0681	月
高崎シティギャラリー	027-328-5050	なし
箕郷文化会館	027-371-7211	月・火
新町文化ホール	0274-42-9133	月・火
榛名文化会館	027-374-5001	月・火
吉井文化会館	027-387-3211	月・火
高崎市倉洲支所(地域振興課)	027-378-4522	土・日・祝
高崎市群馬支所(地域振興課)	027-373-2604	土・日・祝

※電話予約は発売日翌日より受付いたします。

インターネット

高崎財団インターネット チケットサービス(発売日は13:00から)
<http://takasaki-foundation.or.jp/syusaijigyou/>

「高崎市文化事業 友の会」

会費

新規会員 2,000円
継続会員 1,500円

有効期限

入会日から
平成31年3月31日まで

主な会員特典内容

- チケットが特別料金で買える!
- チケットを優先して予約できる!
- お得な情報満載の会報「友の会便り」が届く!
- ためたポイントでチケットがもらえる!
- バスツアーに参加できる!

★詳しくは、高崎財団HPをご覧ください
<http://takasaki-foundation.or.jp/>

★ツイッターでも情報発信中 [@bds04884](https://twitter.com/bds04884)

MEET THE GSO

GUNMA SYMPHONY ORCHESTRA

群馬交響楽団
楽団員インタビュー

Vol.5

脈々と引き継がれる70年の群響サウンド
それを奏でる個性あふれるメンバーたち
楽団員を知れば群響がもっと好きになる

群馬交響楽団
セカンドヴァイオリン首席奏者

秋葉 美果

あきばみか



音色の楽器といわれるヴァイオリン
情景を思い巡らせながら演奏します

「空や夕日、月を見るとすごく幸せです。最近、無性に絵を描きたくなって」。ここ数年で感じた心境の変化だ。「音楽は人間性が現れるものだから。内面を充実させて、新鮮な気持ちで音楽に向き合いたいですね」

🎵 世界を見せてくれた恩師たち

彫刻家の父、画家の母のもと、奔放な幼少時代を過ごした秋葉さん。小学一年でヴァイオリンを始めたのは「願わくは手に職を、と母は思ったようですが、音楽に関しては素人。伸び伸びやらせてもらえました」

先生の勧めで東京藝術大学附属高校を目指す一転、元コンサートマスターによる厳しい指導を受け、難関を突破。闊達に高校時代を謳歌した。

しかし、カルテットに参加するなど自身の方向性に悩んだ大学時代、「一日8時間弾きなさい」とベラ・カトーナ客員教授に叱咤され、国際コンクールに挑戦。奨学金が叶い、ポーランド・ワルシャワへ留学、憧れのヴァイオリニスト、タデウシ・ガジーナに師事した。「今の私があるのは、世界を見せてくれた二人の師のお陰です」

🎵 群響での二十年

ヴァイオリン奏者募集……。音楽雑誌で見つけた記事が群響との出会いだ。以来20年、指揮者、コンサートマス

ターに続いてアンサンブルの要をなすセカンドヴァイオリンを担う。

「ファーストヴァイオリンに寄り添ったり、チェロに乗ったり。流れやテンポを切り替えて、見えない所でも働き続けるエンジンのような役目。しっかり者が多いかな」と笑顔を見せる。

振り返ると、がむしゃらに走ってきた音楽人生だが、この世界へと導いてくれた両親との永久の別れや高崎への引越しを経て、見える景色が変わった。「音色の楽器」といわれるヴァイオリン。「情景を思い巡らせながら演奏します。自然に程近い高崎はワルシャワに似ていて、今の私にぴったり」

休日はガーデニングをしたり、母を偲んで絵を描く時間も取りたいと話す。来年秋に完成する高崎芸術劇場。

「どんな響きか、今から楽しみ。ホールの特徴を生かした新しい群響サウンドを作りたい。セカンドヴァイオリンにも注目くださいね」

Mika Akiba

- 出身 東京都 ■ 入団 1998年9月
- 最近の印象に残っているコンサート
第537回群響定期演奏会(2018年4月21日)「情感あふれる本番でした」
- 好きなアーティスト
イツァーク・パールマン
(ヴァイオリニスト)
- 好きな作曲家
曲の魅力を見つけると好きになる。
今は、シベリウス。

今回はピオラ首席奏者・池田美代子さんを予定しています。お楽しみに！